

きのこ歳時記 8

— 現代の短歌より —

今野 英山

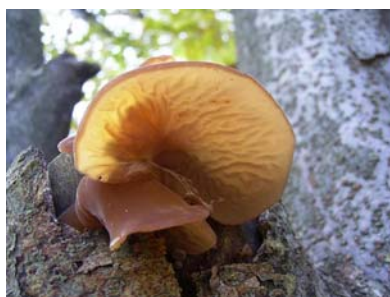
現代短歌という括りはなかなか難しい。一応ここでは戦後活躍した歌人の短歌ということで茸に関わる作品を紹介してみよう。戦前の短歌は、大雑把に言ってアララギ派に見られる「リアリズム」と明星などの「ロンマンチズム」とがせめぎあっていた感がある。それに対して戦後の短歌の特徴は、前衛短歌と呼ばれる動きが台頭してことにある。写真一辺倒を否定し、批評的切り口を鋭くし、比喩や虚構を許容するといった傾向にある。さてそうした動きは茸の歌にも現れているであろうか？

〔塚本邦雄〕 1920～2005

戦後、前衛歌人として先ず登場したのは塚本邦雄である。反写実的かつ幻想的な比喩とイメージを用いて、虚構の中に真実を見せる手法をとっている。

木耳の学名アウリクラリアは「^{きくらげ}耳翼」、きみのそのの歯ごたへ

塚本邦雄の歌は難解なものが多い。それに対してこの歌はあまりにもわかりやすい。「木耳の学名アウリクラリア」は「耳たぶ」の枕詞だ。とするところの歌は、「君の耳たぶを噛んだ歯ごたえ」のなんとよいことよ、ということになるがその奥には更に何かあるのか。収録されている第二十歌集「献身」は塚本七十四歳の出版である。老いてなお瑞々しい愛を詠ったということかも知れない。



木耳

〔前川佐美雄〕 1903～1990

塚本邦雄が師事した歌人。戦前よりアララギを批判し、マルクス主義に共鳴し、キュービズム、シュール・リアリズムにも注目した。新芸術派運動を展開した先駆的歌人である。

秋の真昼のねむりより覚めぬ庭の上に白い茸^{たけ}がくるくる舞ひある

シェイクスピアの戯曲に「真夏の夜の夢」いうのがある。森の

中で妖精が出てくる話だ。ヨーロッパでは夏至の頃に妖精の力が強まり、祝祭の時期となる。一方、日本の祝祭は秋にあり白い茸が妖精のように舞っている。これがシロタマゴテングタケならば死への誘惑ということになるのだが。

〔大西民子〕 1924～1994

大西民子は大学在学中に前川佐美雄の短歌指導を受けている。また塚本邦雄、岡井隆、寺山修司らがいた前衛短歌の運動に加わっている。幻想的な内容の歌として知られ、前衛女性歌人の^{きまかけ}魁^{きまかけ}と言えるかもしれない。

木耳を剥ぎゆく魔物見し日より日毎に^{はげ}烈し林の落ち葉

「無数の耳」という歌集に収録されている歌。「無数の耳」はムンク、ルオー、ゴッホなどの絵画を題材としている。耳剥ぎというゴッホの自傷行為に象徴される不安との戦い。ムンクの「叫び」にも通じるような歌である。

〔前登志夫〕 1926～2008

戦後まもなく現代詩の詩作から出発し、柳田国男などの民俗学を研究する。同郷の前川佐美雄の影響で作歌活動を始める。のちに吉野山中に定住し、晴耕雨読の生活を基本として、独自の歌風を開く。

茸いま暗闇の土に頭あぐ月の出の暗きくらき時なり

瀟洒なる狐の歩みきのこ蹴り赤き月の出に歩むけものら

前登志夫の歌には自然の中の生命の根源のようなものが流れている。しばしば精霊も出てくる。この歌では月が出始めた頃に茸という生命体が頭をもたげ、そしてそれらを蹴りながら獣たちがさっそうと歩んでいる、と詠んでいる。人には見ることできかない夜の世界、はかり知れない世界が進行しているのである。

前衛短歌が台頭する一方、戦前からの大きな流れであるアララギ派では、土屋文明が生活即短歌を唱え、現実に密着した短歌を読み続けている。

〔生方たつぎ〕 1905～2000

アララギの写実主義を骨格とした上に深層心理を掘り下げた独自の手法を追求、戦後女流歌人の一人として名をはせた。

寄りどころなく泡だちてくる思ひ風も光りて茸をふく日よ

理由もなくふつふつとある思いが湧いてくる。その思いは、「風が光り」ということですががしく、「茸をふく」ということでいきよいよく湧き出る、そんな思いなのだろう。心の動きを目の前の情景を写生することでの確に表現している。

〔鹿児島寿蔵〕 1898～1982

「紙塑人形」の第一人者として、重要無形文化財（人間国宝）にも指定されている。アララギでは土屋文明に師事しているゆくりなく訪ね来りし窯ヶ谷炭火おこして松たけを焼く信楽焼の高橋楽斎窯を訪ねた時の歌である。おもいがけずに窯元に来てみれば、マツタケを焼いてもてなしてくれた、というような意味だろう。まだマツタケがふんだんに採れた頃の歌だ。ゆくりなく思いがけずという初句に、たまたまたただけなのという感激がよく表れている。

〔吉田正俊〕 1902～1993

アララギの歌人として選者や発行人を務めるとともに、いすゞ自動車の重役という経済人でもあった。

立ちどまり息を整ふるあひだにも落葉分け若きは菌きのこを
探す

この時すでに五十九歳。若い仲間と行った茸狩りにとてもついでいけない、若い人が羨ましいという思いを詠んでいる。しかし、彼の多くの歌作が経済人としての苦悩や心の葛藤の歌であることを思えば、心救われる束の間の心境を詠んだ歌だとも言える。

〔雁部貞夫〕 1938〜

長い歴史のある「アララギ」が平成九年に解散した。その後継結社である「新アララギ」の現選者である。登山家としても著名であり、パキスタンとアフガニスタン国境の未踏の氷河の探検家として名を馳せている。

掌よりも大きクロカワ焼きて食ふ香りよし苦味よし黒き



クロカワの炭火焼

この茸たけ

登山家としての酒豪
番付に名を連ねるだけに、当然この歌も酒を
飲み飲み焚火か炭火か
でクロカワを味わった
に違いない。登山の途
中で採れたのか、それ
とも馴染みの山小屋で
出てきたのか。情景が
目に浮ぶようである。
なお、雁部貞夫は筆
者の短歌の師である。

戦前からのもう一方

の大きな流れであるロマンチズム系の短歌はどうであろうか？

〔斉藤史〕 1909〜2002

浪漫主義の女流歌人として与謝野晶子の次の世代にあたる。この時期の女流歌人はめずらしい。若き才能に注目したのは萩原朔太郎だった。

夜を光る月夜茸にしきりに逢ひたくてむささびどもは出
でてゆくらむ

幻想的な歌である。ムササビは空を飛ぶ夜行性の哺乳類。なぜ夜に空を飛ぶのか、それは光るツキヨタケに逢いたいからだというのである。宮沢賢治にも通じる童話や絵本の空想世界である。

〔宮 柊二〕 1912〜1986

北原白秋の門下。戦後は『孤独派宣言』を発表。庶民派を自認し人間の孤独、怒り、喜び、愛といった「生の証明」を歌い続けた



夜の月夜茸



紺色一本占地

ことで知られている。

いたわ

しづかなる友の間に 労られ山の茸を今日は食ふかも

この山の茸は、友人自らが宮柊二のために採ったものかもしれない。都会にいる時のようにあれこれ煩わしいことを言う人もいないのだろう。宮柊二は病気がちだったようで、どこかでの療養中の歌だろうか。友への感謝の気持がよく出ている。

〔今野寿美〕1952〜

馬場あき子に師事し「かりん」創刊に参加した。のち夫の三枝鼎之と共に歌誌「りとむ」を創刊。繊細な言葉遣いの歌を詠む。

月夜茸は月の色して光るとぞ峠の夜もまぎれなく秋

この歌も月夜茸である。月の色に光るというのは写真というよ

り想像上の美学である。まぎれなく秋という表現も、想像上の確信ということなのだろう。写真を重視するアララギ系から見ると、

もどかしいと感じる所以である。

ゆえん

〔渡辺松男〕1955〜

やはり馬場あき子の「かりん」に所属。

概念を重たく被り耐えているコンイロイツボンシメジが
んばれ

コンイロイツボンシメジの傘は他の茸にはない色を帯びている。それは明らかに他とは違うぞといわんばかりだ。この自己顕示というか自負心は少々重荷で疲れるのである。作者の渡辺松男も、人とは違う孤高な概念を掲げていると自負しているのかもしれない。そんな自分への激励の歌か。

今回は今まで取り上げられなかったユニークな茸の俳句拾遺としたい。